



第 1 日

国 語

(9:30~10:20)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1ページから6ページに、問題が一から三まであります。
これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

窓の外は雨だった。もう三日も降り続いている。今朝は久しぶりに雲がきれ、青空がのぞいていた。このまま晴れるかもしれないとキタイしていたのに、お量近くなつて、1また、ぽつりぽつりと雨が降り出したのだ。昼休みが終わろうとしている今、雨脚はさらに強く、風まで出てきた。まだ五月⁽²⁾ナカばだというのに、一年二組の教室はむつとするほど暑く、座っているだけで汗がにじむ。たぶん、雨の湿気のせいだ。からつと晴れてくれたらしいのに。藤野美月はガラスに流れる雨粒を見ながら、小さくため息をついた。

お父さんの仕事のつごうで、小学校を卒業してすぐに、このS市に引っ越してきた。引っ越してきて三日目が中学校の入学式だった。お母さんは、入学式の後、毎日のように早く a なさいと言っている。引っ込み思案な美月を心配したことだ。よくわかっているけれど、言われる度に美月の胸はちくちく痛むのだ。友だちなんて、そんなに簡単に作れるものじゃないよ。お母さんにそう伝えたい。美月だって、同じクラスの人とちょこちょこと話をしたり、「おはよう」や「さようなら」のあいさつぐらいはする。でも、ほんとうの友だちなんて誰とでもなれるものじゃない。恵美菜^(えみな)、どうしているかな。牧原恵美菜の丸い顔が浮かんでくる。引越し、そして転校が決まったとき、恵美菜と別れなけれど、ならないことが何より悲しかった。耐えられないぐらいつらかった。悲しくて、つらくて、さびしくて、心細くて、布団をかぶってわんわん

泣いた。それなのに恵美菜は笑いながら、「もう中学生だもんね。それぞれ、新しい学校でガンバレってことなのかもね。うん、そうだよ、美月。おたがいガンバローだ。」なんて、言つたのだ。いつしょに悲しんでくれる、「行かないで。」と泣いてくれると ③シンじていたのに。恵美菜はあたしとちがつて、明るいし、誰とでもすぐ打ち解けられるし、

はきはきしている。友だちだつて他にもたくさんいる。あたしがいなくなつても、さびしくないんだ。そう思うと胸の中に冷たい風が吹き通つていくような気がした。恵美菜が急に遠ざかつた気がした。それから、あまり口もきかないまま別れてしまった。S市に来て一ヶ月以上が過ぎたけれど、²恵美菜には手紙も出していないし、電話もしていない。住所も電話番号も知らせていないから、恵美菜から連絡がくることもない。美月はまたため息をついていた。通学カバンの中から白くまのヌイグルミをとりだす。手のひらにすっぽりおさまるほどの大きさだ。十センチもないだろうか。卒業式の日、恵美菜が渡してくれた。「美月、これ、おまもりだから。」「おまもり? 何の?」「向こうの学校で新しい友だちができるためのおまもり。」それだけ言うと、恵美菜はバイバイと手を振つて走り去つてしまつた。白い小さくまは恵美菜の手作りらしい。ふわふわした布の体と黒いボタンの目をしている。恵美菜、恵美菜みたいな友だちなんて、もう一度とできないよ。くまにそつと語りかける。

「五時間目は音楽です。音楽室に移動してください。リコーダーを忘れないで。」日直当番が声を張り上げている。すらりと背の高い、声の少女だ。たしか高梨陽子^(たかなこ)という名前だった。美月は立ち上がり

b

た。ロッカーからリコードーを持つてこようと思つたのだ。とたん、後ろから誰かがぶつかってきた。手から白いくまが転げ落ちる。ぶつかつてきたのは少年だった。いらっしゃいたのか、乱暴な動作で美月の横を通り抜ける。足が白くまを踏みつけた。「あつ。」思わず叫んでいた。慌てて拾い上げる。踏みつけられた白くまは無残に胴体が破れ、片方の目がとれかかっていた。そのうえ、足型が黒くついている。白いだけに汚れが目立つた。「……ひどい。」一瞬でこんな姿になるなんて。「どうしたの?」美しい声がした。陽子が手元をのぞきこんでいる。「あつ、破裂ちやつてる。かわいそうに。」陽子の指が白くまのお腹^{なか}をなでた。

「あれ? 藤野さん、中に何かあるよ。」「え?」破裂目から小さくオ^④りたたまれた紙がのぞいている。美月はそつと引っ張り出してみた。紙を開く。「おまもり 美月、いつまでも大好きだよ。忘れないで。また必ず会おうね。」恵美菜からの伝言だつた。口にしなかつた思いが書かれていた。「これ、お友だちからのプレゼントだつたの?」陽子がささやくように問い合わせてきた。うなずく。ふいに涙があふれた。恵美菜、ごめんね。冷たいなんて思つてごめんね。ごめんね。「すごくいい友だちだね。」陽子がぽんと美月の背中をたたいた。笑つた口元が少し恵美菜に似ている。

「あつ、あの、おれ……悪かった。ほんと、悪かった。」少年がひょこりと頭を下げる。その拍子に額を机の角にぶつけた。「うわっ、いてて。」額を押さえてよろめいたはずみに、今度は足を滑らせてしりもちをついてしまつた。おかしくて吹き出してしまう。隣で陽子も笑つてい

た。「何だよ、そんなに笑うことないだろう。」少年がくちびるをとがらせて、起き上がつた。「ごめんなさい。」美月と陽子の声が重なつた。二人は顔を見合わせ、また、声をあげて笑つた。破れ、汚れたおまもりをそつとにぎりしめる。今日帰つたら、手紙を書こうと思つた。恵美菜、おまもりの効き目、確かにあつたみたいだよ。ありがとう。そう書こうと思つた。(あさのあつこ 「おまもり」による。)

1 ①~④のカタカナにあたる漢字を書きなさい。

2 □ a にあてはまる最も適切な表現を書きなさい。

3 1 □ b にあてはまる最も適切な語を、第四段落の中から抜き出して書きなさい。

4 1 また、ぱつりぱつりと雨が降り出したのだ とあるが、これは美月のどのような気持ちを表現していると考えられますか。次のア~エの中から最も適切なものを選び、その記号を書きなさい。

ア 満足 イ 爽快 ^{きょうかい} ウ 後悔 エ 豪鬱 ^{ごううつ}

5 2 恵美菜には手紙も出していないし、電話もしていないから ³手紙を書こうと思つたのように美月の気持ちが変化したのは、恵美菜のことをどのように感じるようになったからですか。「……感じていたが、……感じるようになつたから。」という形式によつて、八十字以内で書きなさい。

6 4 そう書こうと思つたとあるが、美月が書こうと思った手紙を、ある中学生が美月の視点に立つて次のように書きました。空欄にあては

まる適切な表現を書きなさい。

恵美菜へ

久しぶり。元気だつた？

今日は、恵美菜に報告したいことがあるんだ。

恵美菜からもらったおまもりがあるでしょ。
今日、ちょっとしたことがあって、おまもりが汚れちゃったの。
ごめんね。これからはもっと大切にするね。
でも、（ ）。

だから恵美菜、おまもりの効き目、確かにあつたみたいだよ。
ありがとう。元気でね。また必ず会おうね。

美月より

とはいつたいいどんな生活なのかという問い合わせが生ずる。「椅子やテーブルや食器などのデザインが暮らしを経済的に豊かにするとは誰も思わない。したがって、この「豊かさ」は、メンタルな豊かさということになる。〔④〕

――次の【A】・【B】の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

【A】一九世紀に始まるモダンデザインは、豊かで健康な生活様式を提案してきた。してみれば、ニューヨーク近代美術館(MoMA)などのモダンデザインの歴史的コレクションは、人々の生活を「豊か」なものにしてきたデザインの歴史的な事例だといえるだろうか。〔⑦〕

「生活を豊かにするデザイン」といふとき、それでは「豊かな生活」

【B】家は、つくられたときに完成するものではない。そこで生活しているさまざまなものもまた、多様な「心地原則」に依拠して実現しようとしたデザイン(提案)の事例だといえるだろう。もちろん、それらは使い手ではなく、送り手つまりデザイナーたちが考える「心地原則」の見本である。言い換えれば、少なくともデザイナーたちが「生活を豊かにする」ことを目指してデザインしたものなのだ。

る人々が、日々、自らの生活のために変化させていく。家具などの什器も同様である。その置き方や使い方を生活に馴染ませていく。したがつてそれらは、「生きられた家」「生きられたもの」なのである。そして、わたしたちは、住まいやものを、より心地良いものにしていこうとする。わたしたちは既存の住まいや家具に囲まればはいても、日々使う食器や家具などの什器を組み合わせる。壁に写真や絵を飾る、花器には季節の花を入れて楽しむ。たまたま拾った石などを窓辺に置いたりする。それが、そこに暮らす人や家族の姿、そして「生活」を表している。

少々、奇妙なタイトルだが『囚人の発明』という小さな本がある。内容を読むと、「囚人の工夫」といったほうがいいだろう。たとえば、手頃な大きさの段ボール箱が手に入れば、それを壁に貼り付けると飾り棚になり、そこには家族の写真などを飾るというのだ。監獄のような親和性の希薄な部屋に住まう人も、粗末ながらも飾り棚をつくり何かを飾ろうとする。監獄もまた「**b** 空間」になるのである。

画家のヴァン・ゴッホは晩年にサン・レミの病院で過ごしている。ゴッホは、その病室の風景を描いている。広い廊下の両脇はカーテンで仕切られ、患者たちのベッドが並んでいる。ベッドの周囲には、患者たちの私物が飾られているようには見えない。その病室は独房のように閉ざされた部屋ではないが、「住まい」のような雰囲気はない。とても悲しげな室内である。そんな室内風景は、それを描いたゴッホの気分を映し出しているのかもしれない。

何もない殺風景な部屋に暮らすのは、まさに悲しげな病室暮らしのよ

うで暗澹たる気分になる。きっと誰もが、自分の部屋の壁に、絵や雑誌からの切り抜きや写真を飾つたりしているはずだ。1 そうすることで、居心地ははるかに良くなるはずだ。「生きられた家」「生きられたもの」とはそうすることで実現されていくのである。

それは、生きられた痕跡こんせきともいえるだろう。だから、人々がどのように暮らしたのか、その痕跡としてある住まいや室内を見ることは興味深い。それは、生活者つまり受け手のデザインである。

(【A】・【B】ともに、柏木 博 「デザインの教科書」による。)

(注) メンタル = 精神的。

1 ①～④の漢字の読みを書きなさい。

2 **a** にあてはまる最も適切な語を、次のアイエの中から選び、その記号を書きなさい。

ア しかし イ さらに ウ たとえば エ あるいは

3 **b** にあてはまる最も適切な語句を、【B】の文章中から五字で抜き出して書きなさい。

4 【A】の文章には次の文が抜けています。この文を入れる最も適切なところを、空欄⑦～⑨の中から選び、その記号を書きなさい。

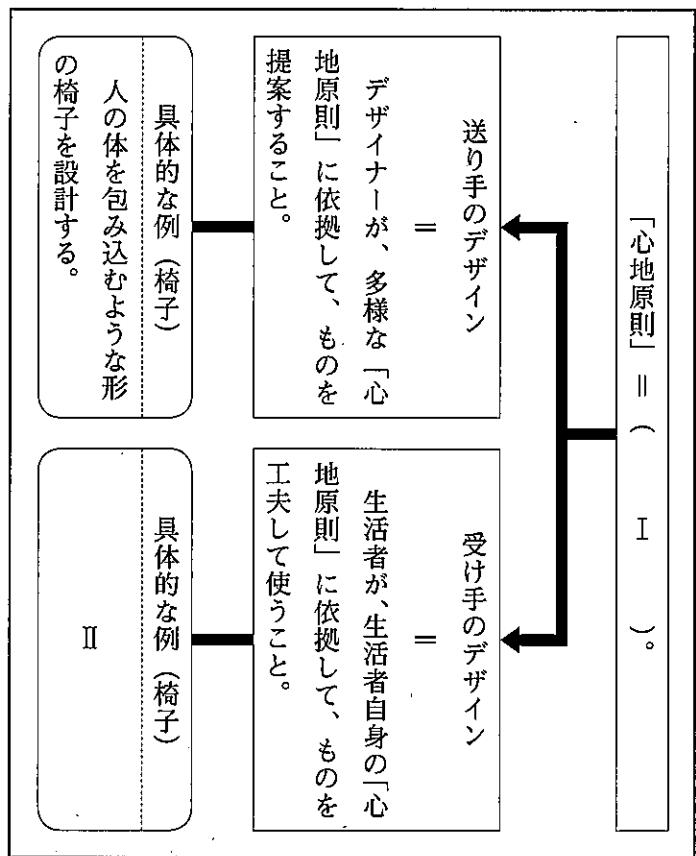
その「豊かさ」は「心地良さ」と言い換えることもできる。

5 1 そうすることとあるが、それはどうすることを指していますか。

三十五字以内で書きなさい。

6 次の図は、デザインについて、【A】・【B】の文章における筆者の

主張を踏まえて整理したものです。この図について、あとの(1)・(2)に
答えなさい。



三次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

片桐石州君は、茶の湯の式に名だかく、一つひに
一流の祖とならせら
かたぎり
作法
一つの流派

れ、茶器万^{よろづ}の鑑定たがふ事なしとなり。江戸へ下りたまひし時、旅館にて尿器を見たまふに、よし有るものなりしかば、主人に命じて、あ

らひきよめさせて見たまふに、甚だ古く、よろしき唐物なりければ、金
中國近來の品物

数片にかへて、買ひ取らんといはしめたまふに、主驚き、さやうのもの
おつしやる そのような

とは、むかしより 3 さらに知らず、かかる不淨のものとなしあき候ふ
全然 このような ござります

へるしからずば、さし上げ申すべし。価下され候ふ事は、あたひ辭し奉るたべて辞退し申し上げる

よし申せしかど、金あまたたまはり、その器をめされ、即命じて、みぢ
とこう」と
たくさん

んに打ちくだかしめたまふ。従者はさらなり、主ふたたび大きに驚きあ
打ち碎かせなさる

きれしに、侯笑ひて、この壺つぼ甚だ古くして、よき唐物なれば、日のき

きたるもの見つけなば、やがて買ひ取り、水屋鉢か、または、相応のも
見付けたならば、ただちに

のにうりわたすべし。かかる不淨のものとは知らずして、高価にもとむ
として

るもの有るべし。甚だけがらはしき事なれば、かくせしなり、とのたま
るもの有るべし。

このよう

へりと、ある人かたられたり。^{あんずるに}、およそ茶人は古き器をこのみ、
考へてみると

貴き価もて買ひ取り、いかなる事に用ひたるものなるを知らず。珍藏愛
高い

玩して、人に誇るもの多し。^{いやしき心ならずや。侯の見識と、天地}
いやしい心ではないだろ？

のたがひ有りといふべし。

(「思斎漫録」による。)

(注) 水屋鉢 = 茶の湯で用いる道具。

1 1 つひにを、現代かなづかいで書きなさい。

2 2 命じて とあるが、だれが何を命じたのですか。次のア～エの組み
合わせの中から適切なものを選び、その記号を書きなさい。

- ア (だれ = 片桐石州君 何 = 尿器を鑑定すること)
- イ (だれ = 片桐石州君 何 = 尿器を洗つて清めること)
- ウ (だれ = 主人 何 = 尿器を鑑定すること)
- エ (だれ = 主人 何 = 尿器を洗つて清めること)

3 3 さらに知らず とあるが、主人はどのようなことを全然知らないかつ
たのですか。現代の言葉で書きなさい。

4 4 侯の見識と、天地のたがひ有り とあるが、次の文章は、このこと
について述べたものです。空欄I・IIにあてはまる適切な表現を、そ
れぞれ現代の言葉で書きなさい。

片桐石州君は、尿器をそのままにしておくと (I)

) ことになると予想して、尿器を打ち碎かせた。一方、
多くの茶人は、高い値段で買った器を、(II)
)。このように、片桐石州君と多くの茶人の見識には天と地ほ
どの差がある。